

第21回「ハートミーティング」意見交換の内容について しょうがい児研究会

★参加メンバーからの主な声

- 市長は教育現場での御経験が長く、また、お子さんを保育所に入れておられたので、保護者としての意見もお伺いしたい。
- （「しょうがい児研究会」の名称について）
障は「さしさわり」、害は「がい」と書くが、しょうがい児は、生き難さはあるが、「さしさわり」も「がい」もないので、敢えて、ひらがなで「しょうがい児研究会」としている。
- クラスに全盲の子が在籍しており、4月当初はこの子に優しく接することができない子どもが少なからずいたが、子どもたちに見えないことから起こる不自由さや過ごし難さを分かってもらうための取組を実施したところ、以後、この子が歩く際には、前方に何か物があれば退けてあげたり、段差があれば声を掛けてあげたり、子どもたちの方から自然に気をつかう姿が見られるようになった。
- 統合保育の現場において、重い難病を抱え、言語面でしょうがいがある子どもの意思を、子どもたちが読み取って伝えてくれるようになった。初めての集団生活は、しょうがいを抱えた子ども本人にとって身体面や感情面に良い刺激となり、子どもたちも、その子と一緒に遊ぶ中で関わり方を自然に考えるようになり、気持ちが穏やかになった。同じ場所で、同じ時間をみんなで過ごすという統合保育の意味や大切さを日々感じている。
- 一人一人の子どもには、良いところも悪いところもあるが、それが認め合えるような集団をつくるのが、統合保育という仕事だと思う。
- 保育所の年長になると保護者が不安になったり、保育所も、連携の仕方に悩んでいる。大きなしょうがいを抱えた子は、それに応じたケアの必要性について理解してもらえるが、受け答えができる、なんらかのしょうがいがある子は、一度面接しただけではわかってもらえない。小学校とどのように連携を取っていけば良いか悩むことがある。



- 職員の異動があるので、常に小学校と顔を繋いでおくことが大事。地域の子どもは同じ地域の小学校に行くので、学校の先生や、地域の皆さんに知っておいてもらえると、虐待等からの見守りにも繋がる。

- ある病気に起因する症状により、クラスの子どもたちから乱暴だと非難されていた子どもがいたが、傍にいた別の子どもが擁護してくれたおかげで、自分を認めてくれる人や優しく思ってくれる人の存在に気付き、自分も周りの人を大事にしようと、思えるようになってきたように感じている。子ども時代に、そのように感じられる経験をたくさん積みめば、コミュニケーションの難しいしょうがいの子どもにとっても、その周りを取り囲む子どもたちにとっても、より生き易い社会が実現するのではないかと思う。その為には私たち保育士がどのようにコミュニケーションの難しいしょうがいの子どもと周りの子どもたちに関わるかが重要になってくる。

- 家庭で問題が起こっていると、子どもがいつもと違う態度や言葉遣いをするようになったり、親の迎えが遅くなってくることがある。普段からよく観察して、子どもと保護者を見守るのも私たちの大きな仕事だと感じている。

- 京都で一時保育がスタートした時に、仕事を持つ母親だけでなく、全国で初めて専業主婦のリフレッシュも取り入れた。家に居て一日中、子どもと向き合っている母親は、ゆっくりすることができない。また、核家族や遠方からの転入の方は頼る人が誰もいない。子どもを保育所に預けている親御さんの中にも、送り迎えを頼める人がおらず、仕事疲れで眠り込んで、迎えの時間を過ぎてしまうこともある。このように保育だけでなく保護者のケアも重要。



★市長からのコメント

- しょうがいに加えて、家庭環境や経済的にも厳しい方が増えている。こんな時にこそ、自立できるように公がしっかりと役割を果たし、支援を行う必要がある。子どもの様子から、様々なことに気づくと同時に、親への働きかけ方という点について、保育士の専門性が必要となる。



- 目が不自由だった子どもが、地域の普通学校に通い、芸大を卒業された例がある。学校は、クラスに困難な子どもがいると、指導が遅れると考えがちだが、その子のいたクラスは一番進学率が良かった。それというのも、先生たちは、目の不自由な子のために、板書をしながら、言葉で読み上げるので、他の生徒たちには目と耳から授業の内容が入ってくる。困難な条件を抱えている子どもに良いことは、全ての子どもにも良いということの実例であろう。
- 重いしょうがいを持っている子がクラスにすることで、みんなが優しさを持っている。優しさの「優」という字は憂いる人のそばに人がいると書く。そして、優秀は優れて秀でるという意味だけではなく、優しさに秀でることを意味している。
- 最高の指導というのは、わからないようにわからせること。子どもに「さあ、これに気づきなさい、わかりなさい」とか、一つ一つわからせていくのではなく、そういう場面を作りながら、気付かせ、理解を促すのが指導の極意。
- しょうがいを抱えた子どもの受け入れに関しては、学校も随分と研修をして体制を取ってきたが、まだまだ足りない面もある。今後も学校の先生と話しをして、仕組づくりと、一人一人の命を大事にすることに、粘り強く関わって欲しい。
- 孤立して子育てをしている母親を無くすためには、地域社会の繋がりを意図的に作ると同時に、子どもとの関わりの中で親が変わって行くことも必要。
- 御池創生館は中学校、小学校、保育所、レストラン、デイサービスセンター、観光トイレ、市役所のオフィスと研修所があり、しょうがいのある人も働いている。デイサービスセンターに来たお年寄りが、保育所の子どもや中学生を見つめ、保育所の子どもや中学生がお年寄りを見る。地域社会の中でも、そこにいる人を見て、

しょうがいのある人を見て，そこで働いている人の姿を見て，自然に優しさや，あいさつを覚え，子どもたちが育っていく。大変な時代だが，子どもを育てることほど大事な仕事はない。これからも皆さんの活躍を期待している。

